西日本

市場創造
おおさか企業の挑戦 ㊴

プロセブン

耐震マット 船・ヘリに照準

底に張るだけ

1995年の阪神淡路大震災、04年の新潟県中越地震など、大地震は多くの人命を奪う。そうした被害を防ごうと開発したのが、プロセブンの粘着耐震マット。主成分はウレタンエラストマーで、粘着性と超低弾性を併せ持つ。家具などの底に張るだけで、家具などが倒れることを防ぐ。震度7クラスの地震でも対応可能だ。

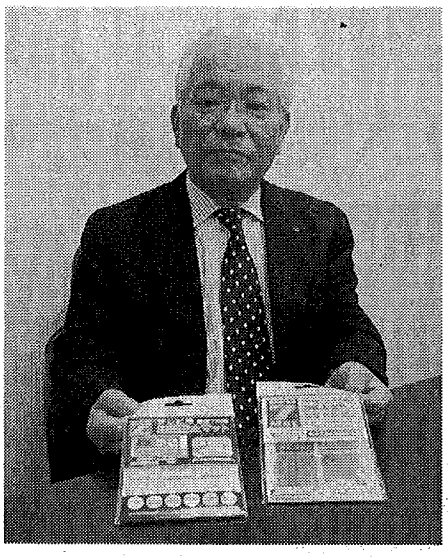
同社の小玉誠三社長はもともと呉服店を経営していたが、阪神大震災で親しい友人の死に接した。友人は被災時に自宅にいたが、建物は無事だったにもかかわらず、激しい揺れで飛んできたタンスに当たり、命を落とした。

販売当初は苦戦

そこで一念発起し、私財をなげうって粘着耐震マットの開発を開始。小玉社長は化学については全くの素人だったが、手当たり次第、材料の配合を変えるなど実験を重ねた。開発は困難を極めたが、コップとコースターがぴったりとくっつく現象に着目。強い接着力とはがしやすさを両立した新素材を完成させた。

00年の発売当初は前例のない商品だけに販売は苦戦。そんな中、04年にアートコーポレーションが引っ越し客へのサービスの一環として導入。これを皮切りに徐々に知名度が高まった。

家電量販店で販売を始めたのもこのころで、「ブラウン管から液晶にテレビが移行する時期で、置いた時の安定性が悪い液晶テレビ用に普及し始めた」（小玉誠志常務）。業務用に加えて、小売りへの道も開けた。



小玉社長はコップとコースターがぴったりとくっつくことからヒントを得て新素材を開発

大手自動車や電機メーカー工場への設置も進んでいる。大地震への備えとして、大手メーカーがプロセブンのマットの有効性を認識し始めた。それまでは工場内ラインをアンカーなどで固定していたが、プロセブンのマットを採用することで、工場のレイアウト変更が容易になった。

改良重ねて11回

製品品質には自信を持っているが「より強いマットを、との思いから発売以来11回改良した」（小玉社長）と、評判にあぐらをかかず地道な開発を重ねている。小玉社長が次のターゲットに狙っているのは、船舶やヘリコプターの備品用マット。船体・機体が大きく傾いた際に、内部の機器転倒を防ぐためだ。既に3次元の動きに耐えられる、既存品以上の強度のマットを開発中という。

「まだ見ぬ需要が今の100倍あるはず」（同）。会社設立の理念である、1人でも多くの人を救うために、プロセブンはたゆまぬ進化を目指している。

▽社長＝小玉誠三氏▽所在地＝大阪市天王寺区清水谷町3の19、06・6191・3800▽従業員＝21人▽製品＝耐震用マット▽売上高＝3億5000万円（09年3月期）

（金曜日に掲載）